

## 同性の双子、異性の双子

小馬 徹

### 双子複合の見取り図

双子は、二人でありながら同時に誕生する点で人間としては例外的で、ここに双子の普遍的な神秘性が潜む。そして「双子のパラドックス」は、どの社会でも分類上の問題を導く。

しかも、双子が生み込まれる社会において、親族が人間関係や社会的な地位を構造化する枠組みとして重要であればあるだけ、双子の誕生が引き起こすこの問題は厄介なものになる。双子は、肉体的には二つだが構造的には単一であり、それゆえに、家族や親族集団に双子が占めるべき位置はただ一つしかないのだから。

ごく大雑把に言えば、第一の解決法は、双子の両方または一方を取り除く事—その極点が嬰兒殺し—である。第二の解決法は、生まれによって帰属するはずの血縁組織から双子を除外して、特別の社会的地位を与える事である。

アフリカの事例に依拠した V. ターナーの考察を基に、以上のような大まかな見通しを立てられるだろう。すると、古今東西、世界の様々な双子慣行を、このいずれかの解決法の様々な強度を伴った変異として把握できそうだ。

### 強い論理、弱い論理

上の見通しは、我々をすぐに一つの別の洞察に導く。つまり、第一の解決法と第二の解決法が必ずしも異質なものではないと気づくはずだ。双子が生まれた家族や親族集団が解決すべき分類上の問題は、2を1へと、あるいは0へと論理的に解消することだ。そのためには、双子の一方または両方を、自らの集団には存在しないようにしさえすればよいからである。

だから、この論理を満足させるうえで、積極的な嬰兒殺しは決して必然的な要請ではない。アフリカの少なからぬ民族が、かつてはただ介

護を控える事によって、双子（の一方）を死ぬに任せたのである。キプシギスなど、ケニアのカレンジン諸民族がその好例である。

積極的であれ消極的であれ、これらの場合、双子の両方または一方を死に至らしめる事になる。これを「強い論理」と呼んでおこう。

双子の両方または一方を自らの集団に帰属させない論理自体は、嬰兒殺しばかりか双子の死さえも必然的に要請するわけではない。上下二層からなる階層社会では、上の階層は双子を下の階層へ、下の階層は上の階層へと移籍する事でこの論理の要求を満たし得るからだ。

また、階層差のない平等主義的な社会も、その社会の外部へ双子の一方または両方を送り出せばよい。ナイジェリア北部では、双子の次生児は余所者に与えられていた [Gunn, H. D., *Peoples of the Plateau Area of Northern Nigeria*, 1953]。カメルーンのモーフ人は男の双子の一人を生家に留め、もう一人をプール人の養子にした [古野清人「双子の民族学」、『古野清人著作集』4、1972]。これらの場合、やがてミッシヨナリーや白人入植者がやって来ると、双子の一方を彼らに引き渡す事は伝統の許容範囲に収まる簡単な応用問題だっただろう。

さらに、そうした伝統をもたない人々の間でも、宣教師や白人入植者、あるいはキリスト教への改宗者たちという無視できない外部が出来た時に、その新たな外部へと双子を排除する対処方を採用する事は、さほど困難ではなかったはずだ。タンザニア東北部に住むバントゥ語系のシャンバラ人は、双子の両方または一方や不具の子供をキリスト教徒の養子とするようになった。母親は、その後双子に会うことを避けたという [Thurnwald, R. C., *Black and White in East Africa*, 1935]。

こうした、双子の両方または一方を殺すことなく自らの集団の外部へ排除する思考法を、「弱い論理」と呼ぶ事にしよう。

### ドラマか論理か

すると、先に二つの別個の対処方と見なしたものは、同じ論理の中での対処方の強度の差異へと解消される事になる。ガーナのアシャンティでは平民に生まれた双子は王に差し出され、王族に生まれた双子は殺されたという事実も、この視点に立てば、同じコインの両面であり、ただ表裏には論理上の強度の差があったただけだと解釈する事ができるのである。

すると、女性宣教師メアリ・スレッサーが、英国の植民地となったニジェール・デルタに住むエボエ人の双子の赤ん坊（生き残りの女兒）を養子として育てた事実も（連載第50回参照）、仮に感動的ではあっても、驚天動地の判断であったとは言えなくなる。実際、この事例の後日談からも、また既に挙げた他の幾つかの事例からも、同時代のアフリカ各地で、双子や三つ子が殺される代わりにミッションナリーや白人入植者に手渡されるという変化が、比較的滑らかなものだった事が窺えるのである。

こうして大局的な見地に立つと、この変化は、井野瀬久美恵 [『女たちの大英帝国』、1988] が描いた程にはドラマティックでも例外的でもなかった事が分かる。それは、西欧列強の植民地支配という同時代的な歴史条件下のアフリカ社会での、「強い論理」から「弱い論理」への必然的な移行の一場面だったと言える。

### 女兒は何故生き延びたのか

ここで興味を引くのは、メアリ・スレッサーが救って育てたのが異性の双子の女兒であり、もう一方の男児は頭を石で滅多打ちにされて既に殺されていた事である。この運命の隔たりには、あるいは性差は関わりがなく、それは単なる偶然の結果であったのかも知れない。

ただ、もし「エボエ人」が父系集団なら偶然

ではなかったかも知れないと推測することもできる。たとえ双子であろうと、女兒は家族や親族集団に占めるべき位置に関して分類上の深刻なパラドックスをもたらすとは必ずしも言えないし、仮にもたらすとしても一時的なものではないからだ。それは、まさに女性が早晩婚出する者だからである。例えば、ガーナ北部のグレンシ人の間では、女同士の双子は、相次いで生まれた同腹の姉妹と考えられているに過ぎない [Manoukian, Madeline, *Tribes of the Northern Territories of the Gold Coast*, 1951]。

### 異性の双子

ここで問題になるのが、異性の双子である。コンゴ民主共和国のンデンプ人は、異性の双子は同性の双子ほど強力だとは考えていない。V.ターナーは、これはアフリカの多くの社会で広く支持されている見方だと述べている [Turner, V., *The Ritual Process*, 1969]。私の知る限りでは、例えばケニアのカレンジンの一派であるケイヨ人は、同性の双子には固有の浄化儀礼を施したが、異性の双子を不吉だとは見なさなかった [Massam, J. A., *The Cliff Dwellers of Kenya*, 1927]。また、スーダンに住む西ナイル語系のヌエル人は、異性の双子は、男児が父親を、また女兒が母親を守るので、その両親は共に無事でいられると信じていたのである [Butt, Audrey, *The Nilotes of the Anglo-Egyptian Sudan and Uganda*, 1952]。

ただし、日本では異性の双子が心中した男女の再来とされて、「夫婦子（めっとご）」とか「畜生腹」と呼ばれて忌み嫌われたが、これに類する例もある。ガーナ沿岸部に住むクワ語系のガー人は、異性の双子は同性の双子よりも遥かに強力で恐るべき存在だと考えていたのである [Field, M. J., *Religion and Medicine of the Ga People*, 1937]。人文・社会系の学問では、論理は一つの強い傾向を映し得るけれども、決して法則などにはなり得ないのである。

（こんま とおる 神奈川大学社会人類学）